

# 自衛隊基地と地域社会

## ——奄美大島への陸上自衛隊配備をめぐる——

相愛大学 藤谷忠昭

### 1. 目的

南西諸島の基地の問題は米軍を中心に議論されるが、新たに建設された自衛隊基地の地域社会への影響についても検討することが重要である。本報告では、奄美大島での現状を概観し、沖縄での建設と比較しつつ、地域社会へのその影響を検討する。

### 2. 方法

奄美大島に新たに建設された自衛隊基地の地域への影響をフィールドワーク調査によって概観する。そのため、自治体、自治会、防衛協会などでのヒアリングを通し、基地と地域社会の関係について分析する。

### 3. 結果

奄美大島には復帰後、2つの自衛隊基地が運用されてきたが、2014年度施行の中期防衛力整備計画に沿って、新たに陸上自衛隊基地が2箇所、建設された。所在市町村である奄美市、瀬戸内町での話によれば、議会などで議論はあったものの、それほど大きな反対はなく、配備が進んでいるという。奄美市によれば、防衛省の説明会での反応は他所に比べ穏やかだという説明担当者の感想があったそうである。島内にも、幟などの反対の意思表示は一部に限られており、与那国、宮古島、石垣のように、各所に幟が立てられ、全島挙げての議論には展開していない様子であった（2018年9月現在）。ネット上では、反対派が、詳細に現状を報告するとともに活発な意思表示を行っていることを考えれば、見落としの恐れはあり、引き続き注視する必要がある。しかし、ここまでの調査では、相対的にはあるが、反対運動は盛んではないような印象を持った。

奄美市にある大熊地区は、奄美市の中心部に近い海沿いにある古い集落である。かつてはマグロを中心とする漁村であったが、埋め立てが進み、現在は、住宅地が広がっている。漁産業で賑わった時期もあるが、現在は、サービス業に従事するものが多い。町会活動も活発で、フェイスブックを作成するなど、外部への発信にも熱心である。基地配備の話が持ち上がったとき、いち早く、共有地を隊員宿舎として提供を申し出た。そのための土地の売却も、総会では多数の賛成を得た。配備後は、隊員との交流を活発に進めたいという話を聞いた。一方で節子地区は、山間部の海沿いにある。所在する瀬戸内町内には、既存の海上自衛隊基地があり、また、戦争遺跡が多く散財している。一方で、自衛隊基地の新たな誘致は、かつてから盛んで、防衛協会の事務局は、町役場の中にある。

### 4. 結論

奄美大島への自衛隊配備容認の状況は、与那国、宮古島、石垣など沖縄の地区と大きな違いがある。配備が集落から離れていることが、ひとつの要因と考えられる。だが、沖縄本島の国頭村の伊地地区の場合、同様に集落から離れたところにレーダー基地が建設されたが、最終的には条件付きで容認されたものの、当初は大きな反対があったという。その違いの理由として、戦争、復帰における歴史的な経緯や、米軍基地の存在などが想定される。こうした奄美大島の配備の状況を知ること、沖縄独自の状況もまた、浮かび上がっている。

### 文献

藤谷忠昭, 2017, 「沖縄の地域社会と自衛隊」『相愛大学研究論集』33: 19-32.

———, 2018, 「沖縄と自衛隊 (4)」『沖縄県の自衛隊及び米軍所在自治体における地域アソシエーションの実証的社会集団研究』研究成果報告書 2: 13-20.